

大妻女大家政 岡本順子、大森正司、岡田守代 東京農大農 加藤みゆき
図書館情報大 佐々木敏雄 大妻高校 徳増しげ子 岐阜大教育 長野宏子

目的 校内暴力、家庭内暴力が社会問題化し、久しいが、その原因としては、受験制度の激化、核家族化の進行、多様な問題が提起されている。このような社会状況の中で、家政学は今こそ本領を發揮し、指針を明確に出せることが望ましいと考える。しかしながら、一方では家政学の独自性を問われ、様々な事象も今日的課題として未解決のままに残されている。本研究では、従来、家政学の構成と構造を明らかにするため、研究課題の時代的変遷とその連関分析を行い、また、今回は、家庭科教育学会の発足により家政学研究などの様に変化したことを知り、家庭科教育、家政学研究の資料とするため、調査実験を行った。

方法 家庭科教育学会の発足した前後3年間(1957年~1959年)の家政学雑誌に掲載された全論文数400件余を対象とした。本論文を家政科学技術分類表(CHE)を用いてインデクシング、集計した。

結果 家庭科教育学会が発足してからは、家政学雑誌中に、家庭科教育の項目がはくはり、当然ながら家庭科教育の標数もはくはり、増えた。また、2500代 教育、余暇、交際、2600代 家庭経営、2400代 保育、保健などの標数(要素)も減少していった。食物における212食品入り、被服における224既製服の選択、購入等も同様の傾向であった。